

スプレー缶の上手な捨て方 あなたの分別が事故を防ぐ！

すぎやまりょうこ
常葉大学 社会環境学部 杉山涼子

スプレー缶というと、どのようなイメージが思い浮かびますか。スプレー缶は、缶の中に入っているガスの圧力で、中身を霧状や泡状にして噴射させる製品のことで、殺虫剤、塗料、化粧品、消臭剤・芳香剤、自動車用品・工業用品などいろいろな製品として使われています。中身を噴射させるためのガスとして、かつてはフロンなどの不燃性ガスが使われていましたが、フロンはオゾン層を破壊するため、現在では主として液化石油ガス（LPG）などの可燃性ガスが使われています。

また、缶の中にガスを充填した製品としては、コンロ用カセットボンベがあります。冬の寒い時期やアウトドアで活躍しますが、こちらは100% LPGが使われています。

2012（平成24）年の生産量は、スプレー缶が約5.1億本、コンロ用カセットボンベが約1.4億本ですので、皆さんの身近なところにも何本かはあるのではないのでしょうか。このスプレー缶やコ

ンロ用カセットボンベが、全国で1年間に1,000件以上のごみ収集車の火災事故を引き起こしていることをご存じでしょうか。2003（平成15）年から2012（平成24）年までの10年間に東京消防庁管内では、ごみ収集車の火災事故が1,472件発生し、そのうちスプレー缶やコンロ用カセットボンベが原因の火災が1,082件、74%を占めるというデータもあります（図1 2010（平成22）年データ）。中身（可燃性ガス）の残った缶が廃棄され、ごみ収集車の中で缶が破損し、漏れたガスに何らかの形で引火することが原因になります。

ごみの分別方法は自治体によって異なりますが、スプレー缶やコンロ用カセットボンベについても例外ではありません。2010（平成22）年に行った全国10万人以上の自治体に対する調査によると、スプレー缶やコンロ用カセットボンベの分別は、資源が41%、別収集・有害ごみが36%、不燃ごみが19%でした。これに対して、火災事故全体の

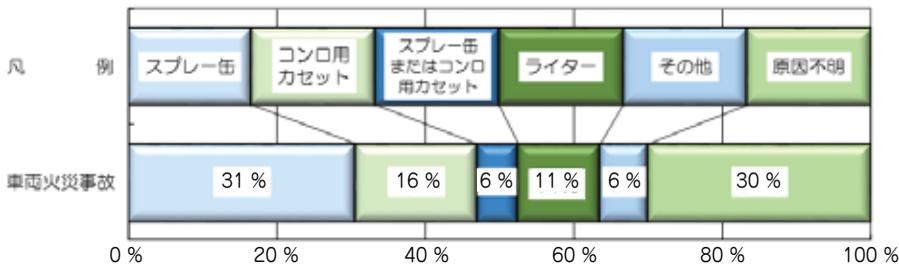


図1 ごみ収集車の火災事故の原因（2010（平成22）年筆者ら調査）

94%が不燃ごみの収集車で発生しています。不燃ごみとして収集している自治体は少数派であるにもかかわらず、不燃ごみの収集車で火災が起こっているということは、残念ながら住民がきちんと正しい分別をしないで、誤って不燃ごみに入れてしまい、結果的に火災が起こってしまっているケースがあるのです。

以上より、①中身の残った缶を廃棄しないこと、②正しい分別区分で排出することの二つを守ること、火災事故は大幅に減らすことができます。お住まいの自治体での正しい分別方法については、分別カレンダーや自治体のホームページなどで確認してください。

ところで、ペンキや殺虫剤など、ご家庭で少し使っただけで中身は残っているけれども使う見込みのない缶はありませんか。自治体では、使い切った缶は収集しますが、3/4の自治体では中身の残った缶を収集対象としていないのです。このような場合、どうやって中身の残った缶を処分すればよいのでしょうか。残念ながら、今のところ明確な回答はありません。どうしても使い切れない場合は、製品に記載されているお客様相談室や販売元あるいは自治体に問い合わせしてみてください。

スプレー缶やコンロ用カセットボンベに穴をあけてから出している方もいらっしゃるかもしれません。前述の調査結果では、穴あけするよう呼びかけられている自治体が約2/3、使い切って穴をあけずに出す自治体が約1/3と分かれています。穴を空ける際には、液が目に入ったり、引火して火災になったりという事故も発生していますので、十分注意する必要があります。

入ったり、引火して火災になったりという事故も発生していますので、十分注意する必要があります。

ごみ収集車の火災事故に対して業界も手をこまねいているわけではありません。例えば、多くのスプレー缶には、残ったガスを安全に抜くことができるガス抜きキャップが取り付けられています（写真1）。残念ながら、ガス抜きキャップはあまり消費者に認知されておらず、使用している人が少ないのが現実です。また、化粧品などを中心に、噴霧剤として窒素ガスなどの不燃性ガスを使用した製品が増えてきています。すべてのスプレー缶をすぐに不燃性ガスに変更することは難しいようですが、消費者の立場としては、スプレー缶の製品を買う際には、どのようなガスが噴霧剤として充填されているのか確認して買うことも必要です。



写真1 ガス抜きキャップ
（この写真の例では「エコキャップシステム」）

スプレー缶やコンロ用カセットボンベは非常に便利な製品ですので、火災事故のことを考えて、上手に消費・廃棄をしたいものですね。